

## 能楽研究 17巻 : 奥付

雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	17
ページ	190-190
発行年	1993-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020446">http://hdl.handle.net/10114/00020446</a>

## 〔編集後記〕

野上記念法政大学能楽研究所は昭和27年（一九五二）4月に発足したので、平成4年（一九九二）が満四十周年にあたる。その記念行事として、同年4月27日から6月14日まで、国立能楽堂と共催の形で「能楽研究所蔵能楽文献資料展」を同能楽堂展示室で開催し、6月9日には第4回試演能として〈鐘巻〉を復曲した。

研究所所蔵の貴重資料一五九点を出品した資料展は、用意した「出品書目と解題」（B4判16頁）の増刷を余儀なくされるほど来場者が多く、研究とは縁の薄い人たちに研究所の充実ぶりを知ってもらったいい機会になった。試演能〈鐘巻〉は、それを改作した〈道成寺〉の乱拍子偏重を見直すため新たに白拍子舞を創作する作業が付随したが、能の実技に詳しい山中玲子所員の発案に基づく素案をシテに起用した浅見真州氏が絶妙に舞台化し、すこぶる好評だった。間狂言を含む台本の整備に所員一同が共同してあたり、三役など出演者にも以前の試演能のとき以上に積極的に協力してもらえたことも嬉しい。当日配布した小冊子（B5判20頁）は四十周年記念誌を兼ねている。

記念行事を年度前半に集めたのは、早いうちに記念行事をすませて、以前から取り組んでいる『鴻山文庫蔵能楽資料解題』の仕事に所員一同が没頭できるようにしたかったからだ。この解題の仕事は、予想を遙かに越える難事で、一つの書物の解題に論文執筆に相当する労力を費やすこともしばしばである。私が担当している「伝書」も、夏季休暇もとらずに頑張ったにもかかわらず完了していない。年度内に刊行できないばかりで

なく、量的に「下巻」一冊にまとめることが至難の見通しになり、新たな対策を考えているのが実情である。

そんなことで、本年度も能楽研究所は多忙を極め、本号の刊行も年度末ぎりぎりになった。原稿の揃ったのが2月初めなのに年度内に刊行できそうなのは、全原稿がフロッピーの形で集まり、電算写植で印刷できたからである。所員がOA機器に強くなったことの効果と言えよう。

変わり映えのしない内容なので記念誌と謳うことはしなかったが、もと法政大学図書館に勤務された関栄司氏の労作「野上豊一郎博士著作目録」を載せることができて、いささか記念の年の発行らしくなった。氏の御好意に感謝する。（表章）

平成五年三月三十日 発行

# 能 楽 研 究 第十六号

102 東京都千代田区富士見二―一七―一  
〇三三三六四九八一五、三三三四一六七二七

編集兼 野上  
発行者 記念 法政大学能楽研究所

所長 表 章

印刷所 三和印刷株式会社  
長野市川中島町一八二二―一